

## 親世代と子世代の大学入試事情

松浦 純子

毎年四月は入学・進級の季節である。希望の大学に合格できた人もそうでない人も、新たな気持ちでこの季節を迎える。

私たちの時代と違い、現在では多様な入試方法があり文科省もそれを推奨している。現在の大学進学率は56%以上。親世代は26%だったので、倍以上の割合である。また、大学の入試方法も親世代は一般選抜(旧一般入試)が中心だったが、現在ではその方法で入学する人は半数以下である。仕事柄、予備校の説明会に行くが、そこでまず言われることは、「ご自分が受験した時とお子さんが受験する今は大学入試事情が全く違います。また、昔『あんな大学に行くななんて恥ずかしい』と思われていた大学が今では上位校になっています。ですから、自分の時代の思い込みは捨ててください」である。先生や保護者に釘を刺す事から話は始まる。

では、現在の大学入試はどうなっているのかと言えば、入試には大きく分けて三種類あり、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜である。建て前であるが、総合型は各大学が求める学生像を示し、それに合っていると思う生徒が受験する。志望理由書・活動報告書・調査書などの提出書類と、試験当日の面接・小論文・プレゼンテーションなどで合否を決める。推薦型は校長の推薦状が必要で、基準以上の学業成績が必要である。一般選抜は入試の点数で合否を決めるおなじみの試験だ。昨年の入学者の割合は右に書いたように一般選抜でない方法、つまり総合型か推薦型で入学する人が55%を占めた。ペーパーテストは避けたい、早く合格を決めたいと考えている受験生が多いのだ。

総合型は数年前まで、毎年八月に合格者が決まっていた。出願即合格内定という大学もあり、高校三年生の残りの半年は目標を持たない生徒がいる事が問題になった。そこで、高校生活を最後まで充実させるために、文科省は出願の時期を九月以降に、合格発表も十一月以降に遅らせた。三種類の入試の中で最も基準があいまいな総合型だが、いわゆる難関大学は提出書類が半端ではない。大学生

活の抱負と熱意を試験官に分かってもらうためだ。それに対して、大きく定員割れを起こした大学では総合型を入学者数確保のための奥の手と考えている感がある。「推薦の基準に届かない場合、総合型を受けさせて下さい」とはっきり言う入試担当者もいる。一旦、高額の入学金や授業料を払ってしまうと、親は子に合格した大学に行って欲しい。子もせっかく手に入れた合格を捨ててまで勉強する気持ちを持続させることはしない。大学・親・子の気持ちが一致してそのような大学は存続している気がする。

入学定員総数と入学希望者数がほぼ等しい昨今の状況を見ると、大学を選ばなければ全員どこかに入学でき、大学も定員を確保できるはずだ。しかし、現実はそのようではなく、充足率が常に低い大学が出てくる。一旦定員割れを起こすと元に戻すことは難しいといわれている。そのような大学では学生を無事に就職させたり、資格試験を受験できるレベルまで学力を高めたりすることが先生たちの仕事になり、一般常識や資格試験の問題を解かせて答えを暗記させ、浪人させないことが求められる。先生たちは定員割れから早く脱却するために、大学生を叱咤激励して日々戦うことになる。